

然し、子供の活動の状態といふものは、一週間、一月と全じ様には留まらない、第一に其日の天氣の具合、次に身體の状況等で以て、違つて來るは當然といはねばならぬ。だから、或日には、遊戯を三十分以上もして居たい事もあらう、或日には、談話を長く聞いて居て、唱歌などは餘り唱ひたくなまいといふ事もあらう、否、日に由りてのみならず、一日の中でも、あれをもそつと長く、これをもそつと少くしたいといふ様な傾きがある。夫を、何でも乎んでも、時間割をきめて置いて、時間割にこうだから是非とも、こうしなければならぬといふ様にやるのは、夫は子供の性質に適應しようといふやみ振りとはいへない。そこで以て巧妙なる保育者は、よく子供の活動の具合を注意する、そして、其活動の傾向といふものを見て、

之に適應して保育して行かうとする従つて、毎日毎週、同一の時間割を繰り返して居る機械的の仕事とは、餘程趣が違ふ。(つゞく)

幼稚園の遊戯 (その二)

松村ひさ

(5) 遊戯が理想の様にいつて居る時にはどんな風であるか

といふ事に就て、此書には、子供に向て指導命令する事が少なく、保姆の言ふ口數も少なく、子供にとつては命ぜられて居るといふ感じが少ないのが良いのであると説いて居ります。保姆の口數が多く指導命令が多ければ多いほど子供は器械的に動く様になるので、多くを言ひ多く命じなければならぬ様な遊戯は、何か子供に不適

當な處があるからなので、こういふ風なのを始終して居ると、子供は遊戯の眞の興味を受ける事ができませぬ。一擧手一投足保母が指圖するといふやうな遊戯がもしございましたならば、それは殆ど死んだ遊戯と申しても宜しいので、よし之程迄でなくとも、之に近い即ち多くの指圖を要するものは、活きた遊戯よりはよほど遠いものであらうと思ひます、又子供の側から申しますと、之は命ぜられたからして居るのであると、もし感じて居りましたならば、そこには苦痛が伴ふとまでは行かずとも、とにかく十分の愉快が伴ひませぬ。こゝうなると遊戯が一つの勤勞になり仕事の様になりまして、遊戯の生命の一半を失ふ事になります。たとへば子供が雀になる遊びをいたしますと、雀になれと命ぜられたから自分は雀になりなければ

ならぬと子供が感ずる様では、眞に雀らしい雀はできぬので、子供が自分で進んで喜んで雀になつてこそ、其遊びが活きて参ります。とにかく遊戯はどこまでも遊戯であつて仕事ではございませぬから、子供は自分で楽しんで居つて命令に由つて動いて居るといふ感じが少ないほど遊戯の價が増すのであると考へます。

(6) 大人は稍もすると子供を自分の思ふ様にしたがる傾向がある。

それ故に大人は常に、自分は大人の意志で子供を逐ひやつて居るのではないか、果して子供は喜んで導かれて居るのであるか、といふ事を考へねばならぬと説いてあります。

なるほど絶えず大人の意志に由りて動き大人に逐はれて居る子供は丁度御者の鞭のまにまに走る馬

の様なもので、自由意志といふものが發達いたしません、子供には子供だけの人格があり体力があり心力があるのでございませぬから、遊戯をするにしても之を子供自身につかはせて樂ませて行く事が必要なので、一々大人の方から制肘干渉してあやつたり引張りまはしたりする必要は少しもございませぬ。

(7) 眞の保姆は子供等と共に子供である。

併し子供等よりは年をとつて居り、子供等よりは賢いものであるとございませぬが、實に自分も子供になりませぬければ眞に子供を知り之をよく教育するといふ事は六かしうございませぬ、或遊戯の時に子供はそれがおもしろい、大人はそんな事は馬鹿らしくておもしろくないといふ風でありましたならば、逆も兩者の精神的融和といふ事は望まれ

ませぬから従つて眞の教育はでませぬ、義務であつて、或遊戯をするのでなく、保姆自身も子供になつてしまつて共に樂んでこそ其遊戯が活きたものになると考へます。

(8) 遊戯には協力といふ事が必要である。

子供が皆で歌つたり演じたりする事が必要である今日頭にならぬ者は明日代つて頭になるといふ風にありたい、又年長者、力の強い者は年少者、力の弱い者の爲に適する様な遊びを撰んで之等の爲に盡すといふ風でありたい。と説かれて居ります誠に此通りで、遊戯にはぜひとも長幼強弱一致協力して共に圖り共に樂むといふ美風が存しなければなりません。之等の道德的基礎は、子供にいつて極めて價ある事なので、成長後、他と協力する、他の爲に盡すといふ事の土臺となるもので

ぞいまして遊戯の價は大に此邊に存する事と考へ
ます。

各地の手毬歌子守歌

盛岡地方の歌

- 8 おん白、しろしろ 素木屋のお駒さん、才三さん、煙草の烟は丈八さん一い二う三い四う五う六う七、わ八わ九う十を唐から下ツた、お芋屋さん、お芋一升幾らだへ三十二文で御座います、もうちとまかろう、ちやからかばん、お前の事なら、まけませう、箆お出し、粗、庖丁、出しかけて頭を切られる八ツ頭、尻ぼ切られる唐の芋淀の川瀬の大水車、水の無い年、おいといて、おいととは長崎腰かけて、若し(申しか)若し小供さん此處は何と云ふ所、此處は信濃の善光寺、

善光寺様に願かけて、梅と櫻と、あげましょか
梅はすいとて、戻されて、櫻は善いとて賞めら
れた一ツちようくかしました

- 10 おもさん、おもさん、お嫁入か、およめりなれば、いふて来い、縮の御衣裳は百三十、木綿の御衣裳は百三十、其れほど重ねてやるならば、朝も速うから起きてから、ちやん、ちやん、茶碗に湯を沸し窓の明りで髪結うて、ほろり、ほろりと、おきアえるは、私の弟の千松は金堀山に追ひやられ、一年たちても状は来ぬ、二年立つても状は来ぬ、三年ぶりで状が来て、お虎をよこせと、書いてある、お虎はやらぬが、わしが行く、私が行つたら何くれる金欄、緞子の夜着、蒲團、鳥渡一ツちよう貸しました
- 11 受取ツた、受取つて、何方様から受取つた、あ